

中国農村社会と集市研究

——一九一〇～三〇年代山東を中心に——

深尾 葉子

華北地域の農村社会経済を分析するにあたって「集市」と呼ばれる農村市場が重要な意味を持つことは、これまでに多く指摘されてきた。山東地区の農村集市とそれをめぐる社会構造について、古典的な研究を行った楊慶堃(C.K.ヤン)は、集市とそこにおける交易の持つ意味を次のように位置付けている。

「在城鎮中，維持着交換組織的是鋪子。但是在農村裏，雖然間中有農家零星的雜貨店，而其中心的交換組織，却是隔天進行一次的市集。農民生產了東西之後，如想出賣的話，大半都拿到市集來賣；如需要買東西的時候，也大半上市集來買。市集實是農村經濟的流出和流入的中心。」⁽¹⁾

さらに、集市の分析によって、「様々な規模の社会経済単位間の関係を維持している交換組織の発展形態を知ることができ、また集市にて販売されている商品の分析によって、地域社会がいかに外的世界からの供給と補助によって成り立っているかを見ることができる」⁽²⁾と述べている。

集市研究の重要性は、その後G.W.スキナーの研究によっても、多くの研究者の認めるところとなったが、⁽³⁾ 同氏の主たる論点である社会の基層単位としての市場圏という意味に止まらず、職業分化、人々の生業形態、情報伝達、認識の広がり、生活のリズム等、農村社会におけるさまざまな側面において重要な視点を提供している。

西山武一は一九四一年の山東省益都県五里堡の調査から、農外職業に従事している人々のうち、農村集市に依存して生活する人々がいかに多いかを指摘している。同地は、主として山菜(桃、梨、杏、クルミ、干柿、棗、山ざし等)を扱う市の立つ山東省中部の鉄道沿線の市鎮であるが、その農地は「とても村民全部の生活を支持するに足らず、漸くその半数を養う程度である」⁽⁴⁾ ために「村民の生活の他の一半の支柱は五里堡の集市である」⁽⁵⁾ と言われる状況であった。調査された五里堡前街の百戸のうち九五戸は農業に何らかの形で従事しているが、そのほとんどが市に係わる仕事にも同時に携わっている。

具体的には販子が二六戸、店を持つもの二四戸、推車二〇戸、その他の雑業が二九戸、出稼ぎ及び兵役が十四戸で、これに農業従事者を加えると延べ二〇八戸となり、各戸の平均労働力数は判らないものの、一戸平均二種以上の仕事に従事していることになる。「販子」^{ヴァンズ}とは、この地域では主に山菜を買い取って、「推車的トワイチャータ」^{トワイチャータ}を雇い、県城や停車場の間屋へ卸す仕事を指し、販子の他に「大販子」^{ダヴァンズ}や「倒販子」^{ダウヴァンズ}と呼ばれるものもある(「倒販子」^{ダウヴァンズ}とは、市で買った山菜を「大販子」に転売し、鞆を稼ぐものを指す)。また、ここで雑業といわれているものは、ほとんどが「短工」^{トワァンソウ}を指し、こ

の他に行商、「担水的^{ダシヨイタ}」、「厨子^{チュウシ}」（料理人）、「拾糞^{シッフェン}」（路上の牛糞馬糞を肥料として拾い集める仕事）、「去核桃皮^{チョウイフ・タオピー}」（クルミの殻取り）等が含まれる。「拾糞」や「去核桃皮」は特に、この地域の最下層の農民にとって欠くことのできない副業であった⁽⁶⁾。このように、同地域では農家のほとんどが何らかの形で、他の農外職業に従事していたわけであるが、そのうち出稼ぎ（東北地域での工場労働者八、及び兵役五を除くほとんどが、集市と何らかの関わりを持つものである。特に、上記の「販子」のなかの分業化などは、過剰人口を一定の技術力（交通手段等）の下で消化するための一種の「商業的インボリューション」ともいえ、その受け皿として「伝統的な」市が大きな役割を果たしていたと考えられるのである。

このように、農村内部での職業構成、職業分化を考えるうえでも、集市は重要な意味を持っていたと言えるのであるが、収入等の経済的な面でも、重要な位置を占めていたことは、西山武一の次の記述によく現れている。

「右の農外職業一一三のうち、販子及び推車の合計四六は全く集市に依存する職業である。又開店二四戸のうち、旅店及び飯舗、餅舗計九戸も集市に依存するものであることは明瞭である。その他の店舗も収入の大部分を集市に集まる近郊農民の購買力に依存していることは推察に難くない。例えば某雜貨店の主人の言によれば、平日には三、四円の売上げがあり、集市の日には少なくとも八円、十円、多い時は五、六十円の売上げがあると云うことである。而も一月のうちに十二回の市日があるのである。」⁽⁷⁾

西山氏はその経済的重要性を「総括して五里堡前街の生活は一半を農耕に、他の一半を集市に仰いでいると云うべく」⁽⁸⁾と述べている。もちろん五里堡は集市鎮であったことも、その比重を高める大きな要因ではあったが、楊慶堃も言うように、当時華北地域では平野部では二、五キロから五キロ圏内にどこかに集市鎮が存在し、5日に一度定期的な市が開かれるのが一般的⁽⁹⁾であった状況下では、集市鎮以外の村落でも購買あるいは販売において集市が重要な意味を持っていたことは十分推察される。五里堡の山果市の例では、十キロ程離れたところから農民が山果を運んで売りにやって来るといふ⁽¹⁰⁾。

集市が農村生活において持っている多面的な意味については、文中において適宜触れてゆくこととするが、ここでは農民が日常的に接していた集市の情景、農民の市との関わり方に関する記述を幾つか紹介し、その後、今世紀初頭からの市に関わる幾つかの変動とその要因を探ってみたい。

1 集市の描写

集市の情景については、戦前の日本人による調査資料を含め、県誌等にも数々の記述が見られるが、ここで山東省の調査資料の中から市に関する記述を幾つか挙げてみる。

(1) 山菜市（益都県五里堡）

「市は冬なら朝五時又は六時から始まり三時間位で終る。二十支里位の所からは夜を徹して農民が山果を運んで来る。其れは天秤（扁担^{ピエンタン}）で担いで来るか、麻袋、布口袋に入れて畜背を借りて運ぶか、框子、籠に入れて手に提げて来るか等である。彼らは前晩は五里堡の旅館に泊まるのである。博山⁽¹¹⁾より梨を運んで来た販子に聞いた所では、彼等は各四十斤入りの梨二籠を天秤棒で担ぎ来り、約百里（1華里は〇・五キロ——引用者注）の道を途中二泊して来たと言う。当時梨一斤は六十銭で、八十斤では四十八円の商売である。然し近くの農民は框子一個に一円、二円の山果を入れて来て、帰りに雑貨を買って帰るような小規模の者が多い。」

これは、前掲の西山武一の一九四一年の益都県五里堡に関する記述であるが（同前書P十一）ここで興味深いのは、双方とも鉄道駅のある博山・益都間の輸送に、鉄道の便が利用されておらず、鉄道附設以前と同様に徒歩ないしは、畜力が用いられていることである。もちろん五里堡から出荷される山菜には鉄道によって済南や青島、煙台等に運ばれるものもあり、そのうち国外へ輸出されるものも少なくないが（例：日本向けの干柿、アメリカ向けのクルミ等）、地域内で消費されるものについては、旧来と同様の交通手段が用いられているのである。この五里堡の山菜市は清代からの義集であったが、その周辺で山菜以外のものも取り引きされていた。

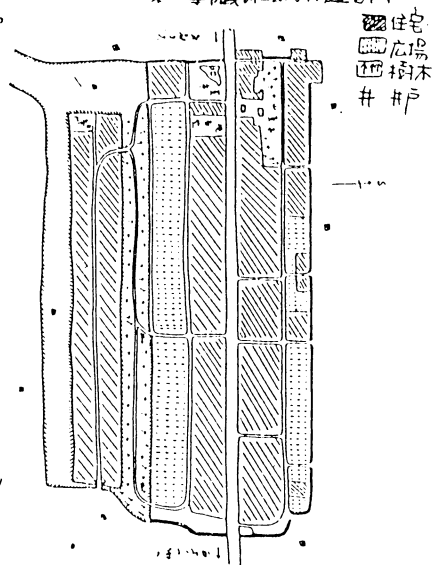
「五里堡集は五日に二回、一六四九の市日である。

一六は小集、四九は大集である。市は観音堂の向側、路南の広場に一番大きな山菜市が立つ。観音堂の空地に菜市及び豚市が立つ。中央の大路に日用品市が立つ。尚農繁期六月から十月迄は観音堂境内に短工市が開ける。繭の市は初夏に山菜市と同じ場所で開かれる。夏秋の候、盛時には二千人前後の客が雲集し、集市の雑踏喧騒の声は遠く県城の城壁からも聞くことが出来ると言う。」⁽¹²⁾

繭市は、やはり周辺の農家が販売に来るものが大半で、買手は当時は日本系の糸廠の派遣商人が最も大口であるという。また、税はかつては干柿とクルミのみ取り引き税が付加されたが、民国以降はあらゆる取り引き商品に一律二%の搬出税を課すこととなった⁽¹³⁾。

▼地図1. 五里堡集集路地図

山東省益都縣社会経済調査報告書P4



(2) 一般集市 (雒平県)

上記の山菓市は特定品目に特化した、どちらかというと特殊な集市であるが、一般の集市に見られる品目を雒平県の例で見ると以下ようになる⁽¹⁴⁾。まず、二五キロ以内の地域から入ってきたものでは次のようなものが挙げられる。

食料品：糧食・野菜・~~米~~・麵・豚肉・点心・掛麵・鶏・卵

日用品：壺灯・木器・柳条や桑条の器具・土布・靴・衣類・蚊香草

宗教用品：香・燭

生産用具：家畜・野菜の種・木材・鉄器

また、二五キロから五〇キロの地域からは顔家橋の酒、章~~邱~~の草席、周村の靴下、帶、筆、墨や印刷物等が加わり、五〇キロから一五〇キロの範囲では、済南の工業品、博山のガラス製品、石炭、石灰、~~濰~~県の土布、臨~~淄~~の陶器、蒙陰・沂水の葉タバコ・刻みタバコ、沙頭や北~~埠~~子の~~鹹~~魚などがある。また一五〇キロよりさらに遠いところからは、青島・上海のマッチ、紙巻煙草、洋紗、洋布、文房具や機械製品、日本製の絹糸布、鉄器、華南清化の竹器、曲阜の蓆、青島・羊角溝の~~鹹~~魚、安徽や浙江の茶葉、江蘇の錫箔等が挙げられている。これらの品目を見ると、農民の商品経済とのつながりの一端が窺えるが、しかし全ての市にこれらの商品が揃っているわけではなく、市の規模によって異なり⁽¹⁵⁾、農民は単一の集市とのみではなく、一般に複数の集市と関わりを持っている。農民の市との関わりについては楊慶堃は次のように述べている。

「小清河北八里的中南四莊，西南四莊，東南四莊等莊子買糧食則往花溝集，買雜貨則往田鎮集，……如顔家集附近的莊子辦較稀少貴重的雜貨，則往城則集和明家集，但辦牲口時則往吳莊及辛梁鎮。」⁽¹⁶⁾

また、農民が市へ向かう様子は一九三五年水野燕によって行われた膠県張耀屯の調査に次のように描かれている。

「張耀屯部落民に最も多く利用さるるは馬店集である。馬店は、九支里にして最も遠きもなく利用さるは部落大にして物資の集散多く、売却にも購入にも有利であり、店舗の数も最も多きが故である……中略……次に四月八日（旧曆三月六日）の馬店集に於ける筆者の見聞実況を述べよう。

張耀屯より当日集に行きたるものは、約四〇名にしてその七割は多少の品物を肩に、天秤棒に、或はの驢馬の脊に乗せて之を集に運び、売却して現金に換へ、或はその現金を以て他の物品を求めんとするものである。……中略……当日部落民の歸途購入して携え来りたるものには、野菜（菠薐菜、葱）、煙草、靴、燐寸、瀝石の類にして、中には穀物を求めたものもある。」⁽¹⁷⁾

彼等は午前八時頃出発し、一時間半程で馬店に到着し、約一時間位を市の交易に費やし、

食事を取らずに十二時前後には帰宅するという。この市は華北の一般的な例よりも交易時間が遅く、午前十時頃にピークを迎え、十二時頃に終息する。⁽¹⁸⁾また、村民が現金化するために市に持ってゆくものは以下のようなものである。

鶏卵（一人一〇個内外）…三人	耙耨（二個）…一人
土布（二～三反位）…一人	高粱桿（一人一荷宛）…二人
天秤棒（五本）…一人	穀物…約二〇人

このうち、穀物とあるのは、大豆・小麦・高粱・粟などで、一人一升～三升ないし一斗位を袋に入れ、肩にかけて市に赴く。市では九割りが男性で、女性はわずかに一割程度、村から市に出掛けてゆく農民もほとんど男性である。当日この馬店集では、約二千人の入出があった。また、市が農民にとって物品を交換するだけの場ではなく、「看熱鬧カンルア・ナオ」と呼ばれるような、気晴らしや娯楽の場としても重要な意味を持っていたことも度々指摘されている。

「集に出づるものには、物品の売買以外に、単に雑踏見物を楽しみに来る遊び人も少なからずあるようである。集に行くものの習慣として、携帯の物品無き場合といえども、必ず袋か或は籠を脇に抱える。」⁽¹⁹⁾

この他、張耀屯では上記の馬店集以外に王殊、官路という常設の店舗を持たない比較的小規模の市とも関わりがあるが、これら三つの集市との関わりで村民の外部との交易はほぼ完結する。また、ごく村に回ってくる行商から購入するケースもあるが、それはごく限られた品目に限定されるもので、主要な形態ではない。村にやってくる行商には次のようなものがある。

土布及び更紗売り・油（石油・豆油）売り・鍛冶屋・鋸碗匠・小間物屋。⁽²⁰⁾

こうした市と農民との関わりはいつ頃から形成され、それはどのように変化してきたのであろうか。それは、市の分布の密度によってある程度測ることができる。なぜなら、地域の需要がなければ、市は設立されないし、また存続できないからである。しかし、山東における市の分布状況を時代を通じて跡付けることは、当面の筆者の力を越え、また小論の及ぶところではない。そこで、断片的ではあるが、今世紀に入ってから農村と市とのかわりとその変容を、次に見てゆきたい。

2 市の変容

筆者は、一九八四年山東を訪れた際、済南の近郊で四九年以前の調査や県誌等にみられる市の交易地点で、現在も集市交易が続けられているのを知ることが出来た。⁽²¹⁾しかも、村民の証言によれば、「祖父の祖父の代から一度も途切れることなく、定期的に市が開か

れていた」とのことである。文革中の一時期市が縮小されたこともあったが、ごく一時期を除いて集市交易は継続されていた。しかし、このことは市をとりまく環境が、半世紀以上の間、一定して変わらなかったことを意味するものではない。ここでは、今世紀初頭の山東における鉄道の敷設と、その後の新作物の導入（葉煙草栽培）とのかかわりに焦点をあて、市の変化についていくらか述べることにする。

(1) 膠済鉄道の敷設と農村集市

山東省においては、主として明末清初以降、商品経済の発展とともに集市数が増加し、⁽²²⁾それらを結ぶ地域間交易も海運などの発達とともに、盛んになっていた。このようにいわゆる「伝統的」構造が一つのピークを迎えつつあった時期に、⁽²³⁾鉄道敷設は行われたといえる。そして、集市交易についてみれば、楊慶堃やスキナーも指摘しているように、鉄道敷設少なからぬ変化を与えつつも、全体としてはその交易を衰えさせる方向ではなく、数の上でも頻度の上でも活発化させる方向に働いたといわれている。⁽²⁴⁾

鉄道によってもたらされた変化を表すものを幾つか挙げてみたい。まず、第一は商品化の進展に関わるものである。

「一九〇四年の膠済線、一九〇六年の平漢線、一九一二年の津浦線の完成以来、貨幣経済は急速に前進していった。近代交通の線にそったこの地方に於いては、以前には農民たちは自分自身で作った綿から自らの手でもって自分たちの布地を紡ぎ且つ織るのが常であった。然るに、一九一三年頃には彼等は海外から輸入された糸から織りはじめ、あまつさえ輸入された布地が流行になったのである。

農民たちは灯火用の食物油を得るには自分たちの作物を一里も離れたところにある小さな油房にもって行って油と交換するか、或は自分自身で作った油のとれる植物から搾油してもらうために、誰かに雇われるか、どちらかの手段をえらぶ習慣であった。だが1913年頃には、彼等は油を得るには現金を支払わねばならなくなった。其の灯火用の植物油は迅速に輸入せられたケロシンにとってかわられたのである。」⁽²⁵⁾

もちろん、これは一つの象徴的な変化であって、すべての農家の状況を表すものではないかもしれないが、主として一九一〇年代の鉄道沿線で見られた状況の一端を、洋布や灯火用油等の具体的な事例をとりあげて記述したものとして興味深い。ここではこれまで現金を介さずに、或は自給によってまかなわれていたものが、鉄道敷設以後新たに商品経済に組みこまれてゆく様子が描かれている。

また、先にとりあげた益都県から約五キロ西にある、杜家荘という山村型集落での調査にも以下のような一文が見られる。

「本村が今日に於いても、各農家の経済が大体において自給自足性格を持ちながら、

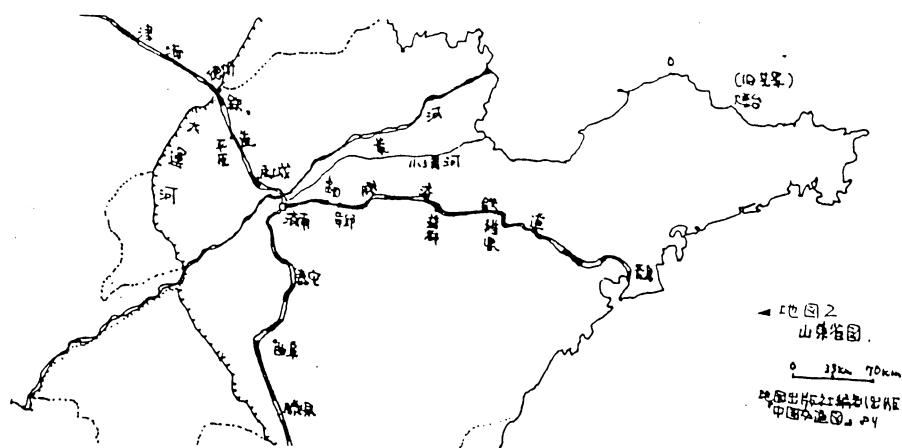
而も尚一方に相当量の貨幣を獲得しないでは、農家の経済循環を完了し得ない事実である。之れに依って、低廉なる農家の日用品が急速に県城及び村の集市に進出して来て、農家の生活部面は、一方的に貨幣化し、農民の貨幣獲得要求は促進された。棉布、石油、塩等は、その中でも最も著しいものである。村の古老の話では、本村にても三、四十年前（一九一〇年前後を指す——引用者注）迄は、棉花を自ら作って、自家用の棉花、棉布は自給していたとの事である。之が安い洋布の侵入後、全く他給的購入品と化した。マッチが入り、一般化したのも、矢張りここ三、四十年來の事である。」⁽²⁶⁾

これも、マッチや洋布といった商品が生活物資として鉄道敷設後に流入してきた様子が当時の村の古老により回想されており、貴重な記述である。これらはいずれも定量的な分析ではないが、一九一五年の外務省『通商報告』に、青島からの輸入品目の主なものとして、綿糸・棉布・マッチ・砂糖・煙草・石油等が挙げられていることから、こういった日用雑貨が沿線農村に対し消費面からの変化を与えていたことが裏付けられる。⁽²⁷⁾

二番目に挙げられるのは、商人や山東省全体の物資の流れの変化に関するものである。山東では鉄道敷設に先立つ、一九五八年の芝罘開港以來、それまで発達していた内陸部の商業都市、~~龍口~~龍口の商業資本が漸次芝罘へ移動し、これに黄県・掖県の資本が合流して、~~龍口~~龍口から芝罘に至る新たな商業ルートが開けるという変化を経過していた。⁽²⁸⁾しかし一八九八年青島が開港され、続いて膠済鉄道が敷設されると、一時芝罘と結びつきを強めていた龍口の商業資本が再び膠州青島へと移動し、約四十年間栄えていた芝罘が、にわかに不況に追いやられることとなった。さらに一九一二年に津浦鉄道が開通し、山東省西部が南北に結ばれると、これまで元代以降の繁栄を見せていた南北の大運河に関わる商業資本と、民船運輸が決定的な打撃を受け、⁽²⁹⁾山東全体の流通構造が新たな再編成を迫られることとなったのである。これは次のように言われている。

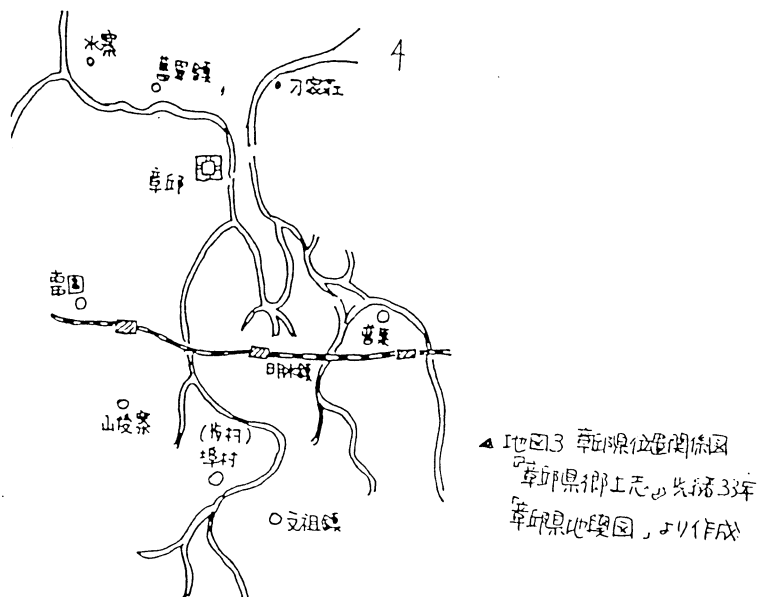
「更に一九一二年独英シンジケートの経営になる津浦鉄道の開通を見るや、従来青島及び山東鉄道の影響を受けざりし山東の西端と北端、即ち運河と黄河の流域は再び青島と連続するに至った。この鉄道は、本省内に於いては德州・平原・禹城・済南・泰安・曲阜・兗州・鄒・滕・~~嶧~~嶧・韓莊等を連結し、西部山東を縦断しているので、何よりも先ず平野地帯を渤海に注ぐ諸河川に群る小商業資本並に小運輸資本は、津浦北段の諸都邑と共に、この新しき大動脈を通じて山東鉄道に連繫するに至った。又この勢力と反比例して、元朝以來南北交通の要道たる大運河に群る商業資本と、民船運輸資本は、凋落の過程を辿るに至ったことは、既に知らるるが如くである。」⁽³⁰⁾

こうして、山東は青島を基点に、T字型をなす鉄道を中心として、網の目のように発達した地方商業資本ないし零細な運輸資本（一輪車・驢馬・民船等）が、何らかの形で連繫するという新たな構造を迎えた。



こういった商人の移動ないしは変化によって、集市交易にも変化が見られた。例えば鉄道沿線地区では、市の交易地点が鉄道駅に近い地点へ移動したり、また鉄道駅周辺で定期市が常設市鎮となったり、といった変化である。

具体的な例としては、先に挙げた済南近郊の章邱県で、かつて東関・南関・西関・北関と四つの定期市を有していた章邱県城が光緒三十三年（一九〇七年）の段階では鉄道より北約十五キロの地点にあるが⁽³¹⁾（地図参照）、その後鉄道駅のあるかつての明水鎮に移動し、旧章邱県城は綉恵と呼ばれる一市鎮地となったことなどである。また、移動後の章邱県城は旧来の市日に大集が開かれる以外、ほぼ毎日市が立つようになっている。⁽³²⁾



このように市の分布や、日用品等の消費物資から農村経済に影響を与えた鉄道敷設であったが、農民の生活及び経済に直接大きな変化をもたらしたものとしては、鉄道敷設に伴って進行した、新作物の導入が挙げられるべきであろう。

(2) 葉煙草栽培の普及と農村集市

山東省膠濟線沿線では、英米トラストによって一九一〇年代に持ち込まれた、葉煙草栽培がその後急速に発展し、鉄道沿線の東西百二十キロ、北側約二十キロ、南側約四十キロを範囲とする大産地を形成するに至ったが⁽³³⁾、この葉煙草栽培の普及もまた農民と市との関わりに変化を与えた。

まず、葉煙草栽培導入後、農民が貨幣経済とのつながりを急速に強め、葉煙草栽培期には、自家用穀物をも市に購入に来る農民が存在したことは、天野元之助によっても指摘されているところである。⁽³⁴⁾ また、葉煙草は収買期の十月～十二月に鉄道駅周辺の収買場で、農民からの直接買い付けがなされるが、この収買場が新たな交易場として吸引力を持つようになったのである。例として先の『山東省膠濟沿線地方農村の一研究』のもう一つの調査地であった益都県小田家荘の事例を挙げてみたい。

「小田家荘から益都站迄約二〇支里（約十キロ——引用者注）、現在はトラックの通過可能な道路が出来ている。村と村外の経済的関係では、勿論、益都站が最も重要であつて、益都県城との関係は比較的少ない。煙草の販売、搬出、その他必要物資、石炭、豆餅、日用品等、の購入は多く車站の町で行われる。」⁽³⁵⁾

これは、葉煙草栽培農村であつた小田家荘が、葉煙草栽培導入以後、鉄道駅でもあり、収買所もある益都站との関わりを強めている様子を表すものである。葉煙草の販売を契機に、葉煙草生産に必要な石炭（乾燥用燃料として）や大豆粕（肥料）の購入の以外に、他の物品の購入も収買所の所在地へと移行しているようすは以下の一文にも見られる。

「現在までのところ、煙草の販売は悉く益都站にある葉煙草収買所で販売される。石炭大豆粕も又益都站に在る商人から購入する。食糧は矢張り車站の糧店で購入することが多い。極僅かに、県城東関又は孟家爐に立つ集市で行れ、食糧に余裕ある農家で之を販売する場合は多く集市で行われる。其他農民の日用品は集市で求めることが多いが特殊なものは車站がその供給地である。」⁽³⁶⁾

こうして、新作物を通じてその収買所および鉄道駅との関わりが深まると、旧来関わりが深かった、集市や県城との経済的なつながりが徐々に薄れてゆく傾向が見られる。

「そして本村の経済は、孟家爐の集市と車站との間においてその大半の関係を終るのであつて、煙草に依つて経済が変動する以前に深い関係があつたと言われる、県城・東関及び他の寿光県や益都県下の他村等との関係は今日は殆ど意味を失つて来つつあるので

ある。」⁽³⁷⁾

このような変化は、花行などによる庭先販売などが発達した棉花とは状況を異にするものであるが、鉄道を契機として広がった作物の市にもたらした影響としては興味深い。最後にここで、煙草の収買場周辺に他の商店や露店が集まり、あたかも新しい市が形成されたかのような様相を呈していることを示した一文を紹介したい。

「十月以後、各所菸商、都紛紛地到這裏來設場收買。於是每個站旁無形中形成了一個熱鬧的市場。旗桿上飄動着各煙公司的商標旗，紅的、綠的、白的、黑的、長的、方的、五色綵紛的煞是好看。道傍塔滿了臨時商店，東洋磁器，東洋花標，東洋……破裂的留聲機的聲音，吸引了無數鄉下人，有幾個還顯出驚訝的表情來。」⁽³⁸⁾

ここに物を買いに来た農民は、一つものを買うのに少なくとも3~4回は値を叩き、あちらの店やこちらの店を何度も行ったり来たりして、最後に相互がそれぞれ一歩ずつ譲歩してようやく売買が成立する、とある。⁽³⁹⁾

以上、農村経済における重要なファクターである市に焦点をあてて、一九〇~三〇年代にかけての山東農村経済の変化の一端を考察した。市に関する記述は断片的なものが多く、全体像を系統的に知ることは難しいが、幾つかの調査報告等から得られる像をつなぎあわせることによって、当時の農村集市とそれに関わる農村社会経済の変容が、幾らか明らかになったのではないかと考える。

- (1) 中国鄉村建設学会『鄉村建設』第14期掲載。楊慶堃「市集現象所表現的農村自
自足問題」(一)市集現象與農村自給自足局面之關係。
- (2) 同上。
- (3) G.William Skinner, *Marketing and social structure in rural China*, Association for Asian Studies, Inc. 1973.
- (4)、(5) 北京大学附設農村經濟研究所『山東の一集市鎮の社会的構造』(1941年11
月) 執筆者：西山武一P9。
- (6) 同上書P16。
- (7) " P15。
- (8) " P16。
- (9) 楊慶堃前掲論文(三)市集的種類及其活動範圍。
- (10) 西山武一上掲書、P11。
- (11) 益都の西南約60キロの地。石英や石灰石、石炭等、工礦石を産出し、膠濟鉄道の支
線も伸びている。ガラス工芸等も有名。
- (12) 同前書P9。
- (13) 西山武一同上書P11。
- (14) 以下は天野元之助『中国農業の地域的展開』一九七九年龍溪書舎P228。資料の出
所は前掲の楊慶堃論文。
- (15) G.W.スキナーはこれを小市場・原基市場・中間市場に分類し、楊慶堃は基本集と補
助集という分類を用いている。
- (16) 楊慶堃前掲論文(一)市集現象與農村自給自足局面之關係。
- (17)、(18) 南滿洲鉄道株式会社經濟調査会『山東省一農村(張耀屯)に於ける社会・
經濟事情』執筆者：水野薫1935P65。
- (19)、(20) 同上書、P66。
- (21) 山東省、濟南東郊章邱県内の集市(歩村、文祖、普集、棗園等)。
- (22) 山根幸夫「明清時代華北における定期市」『史論』第八集、東京女子大学P495。
- (23) G.W.Skinner前掲書P8、P83~85。
- (24) C.K.Yang, *A NORTH CHINA LOCAL MARKET ECONOMY*. International Secretariat
INSTITUTE OF PACIFIC RELATIONS, 1944.P6。
- (25) 陳翰笙『産業資本と支那農民』水田博訳、東亜叢書、生活社版1940、P14。
- (26) 北京大学附設農村經濟研究所『山東省膠濟沿線地方農村の一研究——益都県杜家莊

- 小田家莊調査』執筆者：渡辺兵力1942、P16。
- (27) 外務省『通商報告』第217号、P761～766。
- (28)、(29) 南満洲鉄道株式会社経済調査会『山東省経済調査資料』第一輯1935年P2。
以下の記述も基本的に同書による。
- (30) 同上書P5。
- (31) 『章邱縣郷土志』市鎮、光緒33年。民国57年台北、成文出版社。
- (32) 1984年聞き取りによる。’84年段階で章邱県城では、大集が(4・9)の日取りで開かれ、2万人規模の市が立つという。またほぼ毎日市は開かれる。
- (33) 興亜院青島出張所『事変前に於ける山東葉煙草事情』執筆者：島村明房1942、P5～6。
- (34) 天野元之助前掲書、P229。氏は「棉花・煙草・落下生産地の農家が、ほとんど皆その食糧を自給せず、東北あるいは内蒙古自治区の食糧(アワ)などが鉄道や船舶で山東市場に送り込まれていた事実を、私は忘れることができない。」と記述している。が、葉煙草に関しては状況は若干特殊で、棉花のように作付け面積の8割り9割りを商品作物が占めるというモノカルチャー的栽培というものではなく、葉煙草栽培面積はその作物の性質上、植え付け時期でも耕地の2～3割りを占める程度にすぎなかったことは、前掲の『山東省膠済沿線地方農村の一研究』にもP179指摘されている。葉煙草農民が食糧を購入したとすれば、それは耕地の特化というよりは、労働力(葉煙草栽培は極めて労働集約的である)の集中化または、現金収入の増大によるものと考えられる。
- (35) 上掲『沿線地方農村の一研究』P92。
- (36)、(37) 同上書P95。
- (38)、(39) 徐永綏「魯東冬市」『申報週刊』2巻24期1937年4月11日上海P300。